



→4度目の先乗り。  
まだ落ち着きはないが、ときおり水先案内犬らしさが見られるようになったクマ。

↑「たよりにしてるよ、クマ」と言葉かける若舟頭。「うん、まかせてよ」といっているのだろうか。



クマの第一声は、「キヤイン」だった。通訳すれば、「痛ッ！」か。

生まれて三日目。そう、忘れもしないバレンタインデーの翌日のことだった。いきなりクマのお尻に衝撃が走った。ポトリと尻尾が落ちる音とクマの叫ぶ声とがほとんど同時に。

あわててコーギー母さんがとんできて温かい舌でお尻をなめてくれた。

あとでご主人と奥さんがひそひそ話すのを聞いた。

「切りそこなっちゃったア」

「ハサミじゃ無理だよ」

「だって、いきなり動くんだもの」

「まあいいさ、ご覧よ、母親がなめてやっているから、すぐに治るだろうッ」

どうやらこういうことらしい。

コーギーは生まれおちるとすぐに尻尾を切り落とす。もともとコーギーは羊や牛を追うためにスコットランドで品種改良されて誕生した使役犬だそう。ところが、どういうわけだか、尻尾だけが短くできなかった。

そこで生まれてすぐに尻尾を切り落とす。ふつうはゴムや紐などできつく

## 今週のクマ

2008年2月、3月は雨の日がわずか2日、雪こそ降らなかったが、生まれたばかりの子犬には寒さはこたえた。姉妹で暖をとる。上がクマ。このころの名はジュンちゃん。



→春がやって来ると、どこからか“歩け歩け”の群が出てくる。この日は板橋からの100人ちかい大集団だった。



しばって自然に落とす。ところがクマの場合には、ハサミで切られた。

そんなこととは知らないクマは、尻尾を持ち上げられたとたんにくすぐったくってお尻を振ったものだからたまらないう。ねらいが定まらず、三センチばかり残して切られてしまった。

傷口は一週間ほど治ったが、切りそこなった尻尾はポヨポヨと残った。

「あんまり大きな声ではいえないけど、見るたびにあの日のことを思い出すわ」  
走りまわるクマを見ながら、奥さんはひとりつぶやくのだった。

生家にいたころのクマの一家は、ご主人に奥さんにお嬢さん。コーギー母さんにコーギーおばさん、それにもう一頭のおじさん。クマに妹の大家族だった。

散歩は一大事。江戸川の河川敷まで車でやって来ると、いっせいに放たれる。五頭がそれぞれに駆けまわる。

泳ぎが大好きなコーギー母さんとコーギーおばさんは、江戸川に向かっていちもくさん。クマと妹は土手の草むら。のんびり広場を歩きまわるのはおじさん。

クマは幸せだった。当時のクマは体色がグレーで小泉純一郎の頭の色に似ていたのでジュンちゃんと呼ばれていた。